

## 渋沢栄一の生き方（4）

### 大蔵省を辞して実業界へ

官界の硬直した体制に限界を感じた栄一は、大蔵省を4年で辞め、実業界へ転進しました。ヨーロッパの国々やアメリカの繁栄は商工業者の活躍のおかげであり、日本も豊かな社会や国民の幸せを実現するためには商工業を盛んにしなければならない、と栄一は考えていました。

まず栄一は、日本にとって最も必要だと考えていた銀行を設立しました。第一国立銀行と呼ばれたその銀行は、「みずほ銀行」と名前を変えて、日本を代表するメガバンクとして現在でも大きな存在感を示しています。

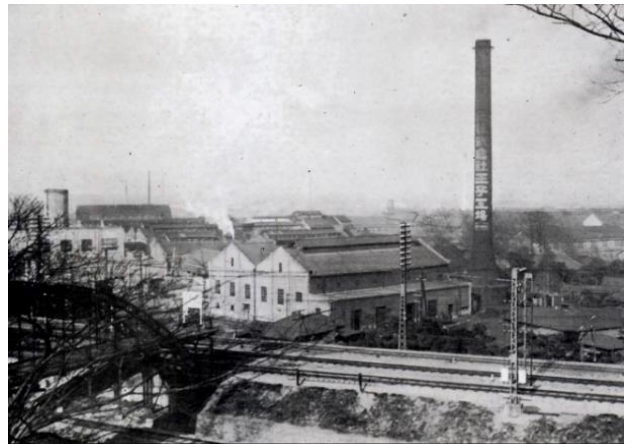
また、明治維新の後にペンが普及し始めたことで、和紙ではなく洋紙が大量消費される時代に入ってきました。これまで洋紙は輸入に頼っていましたが、高価ゆえに日本中に普及することが難しい状況でした。そこで栄一は製紙会社である「抄紙会社」を設立しました。これが後の「王子製紙」であり、業界最大手の会社として現在まで存続しています。

また、文明開化を推し進めるためには、燃料が必要になります。モノを運んでいる途中で事故が起きたら、その損害を補償する保険も必要になります。栄一は、国を強力に発展させるために必要となる事業をいち早く察知しては、会社組織として立ち上げられるよう次々に手助けをしていきました。

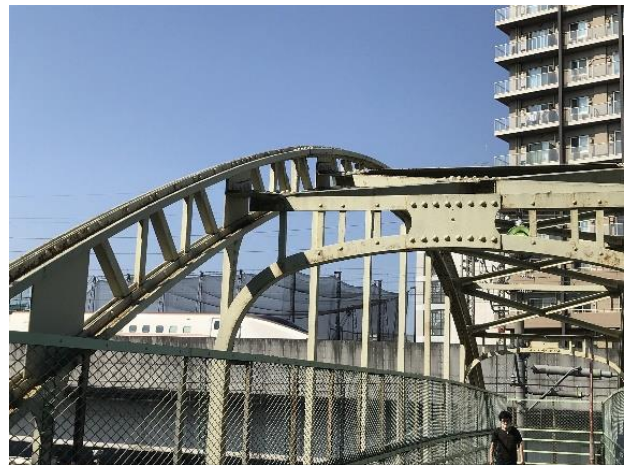
さらに栄一は、企業人たちが集まる東京商法会議所（現在の東京商工会議所）を組織して会頭となり、会社づくりから運営の仕方に至るまで相談に乗りました。栄一が創立に関わったり育てたりした会社は、その数500社を超えます。しかし栄一自らが経営していたのは、第一国立銀行と抄紙会社の2社だけでした。栄一は、自分だけが金儲けをするのを良しとせず、富は独占するべきものではないという信念を貫き通したのです。

この信念のもと栄一は、経済の発展は道徳にかなったものでなければならない、と生涯説き続けました（道徳経済合一説）。いたずらに私利私欲に走るのではなく、公利・公益も考え、社会全体を豊かにすべきだという考え方です。その根底には、幼少期に学んだ「論語」の精神（忠恕のころこ＝まごころと思ひやり）がありました。

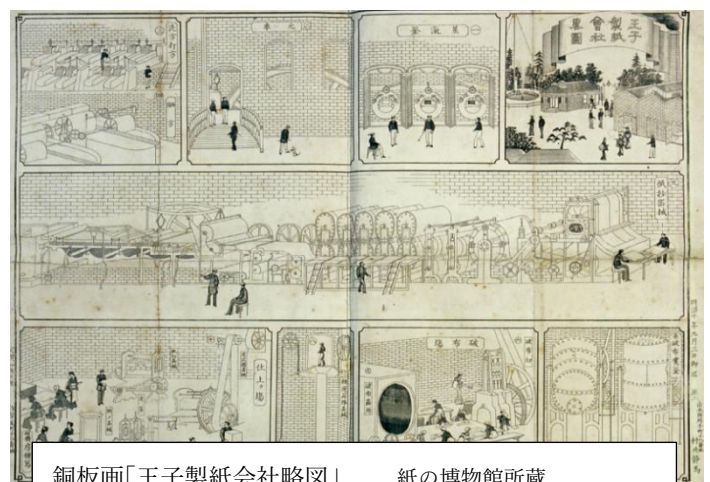
我々が当たり前のように使用している電気やガスなどのインフラや、鉄道、商船、銀行や保険会社、工場や倉庫、劇場やホテル、病院など、あらゆる分野の設立に栄一が大きく関係しているのは、こうした栄一の能力と信念があったからだったのです。次の号からは、現代に残る企業や産業に栄一がどのように関わったのかを紹介していきます。



王子製紙 【提供 北区立中央図書館】  
手前（左）に鉄橋が見える



王子駅南口の鉄橋は現在も使われている



銅板画「王子製紙会社略図」 紙の博物館所蔵

